





これは
遺書です



これを読んだ
あなたに



私という人間が
この世に存在したことを
知ってもらえますように



そして
もしもー

万が一
手遅れでなかった
としたら

これを
読んだ誰かが

ほひ

あは

あは

どうか私を
助けてくれます
ように

アビバの巡北問



私は
ユリスキー教の
神官です



貞操・同性愛を旨とし
汚らしい男性から
距離を置くという
教義を説きながら

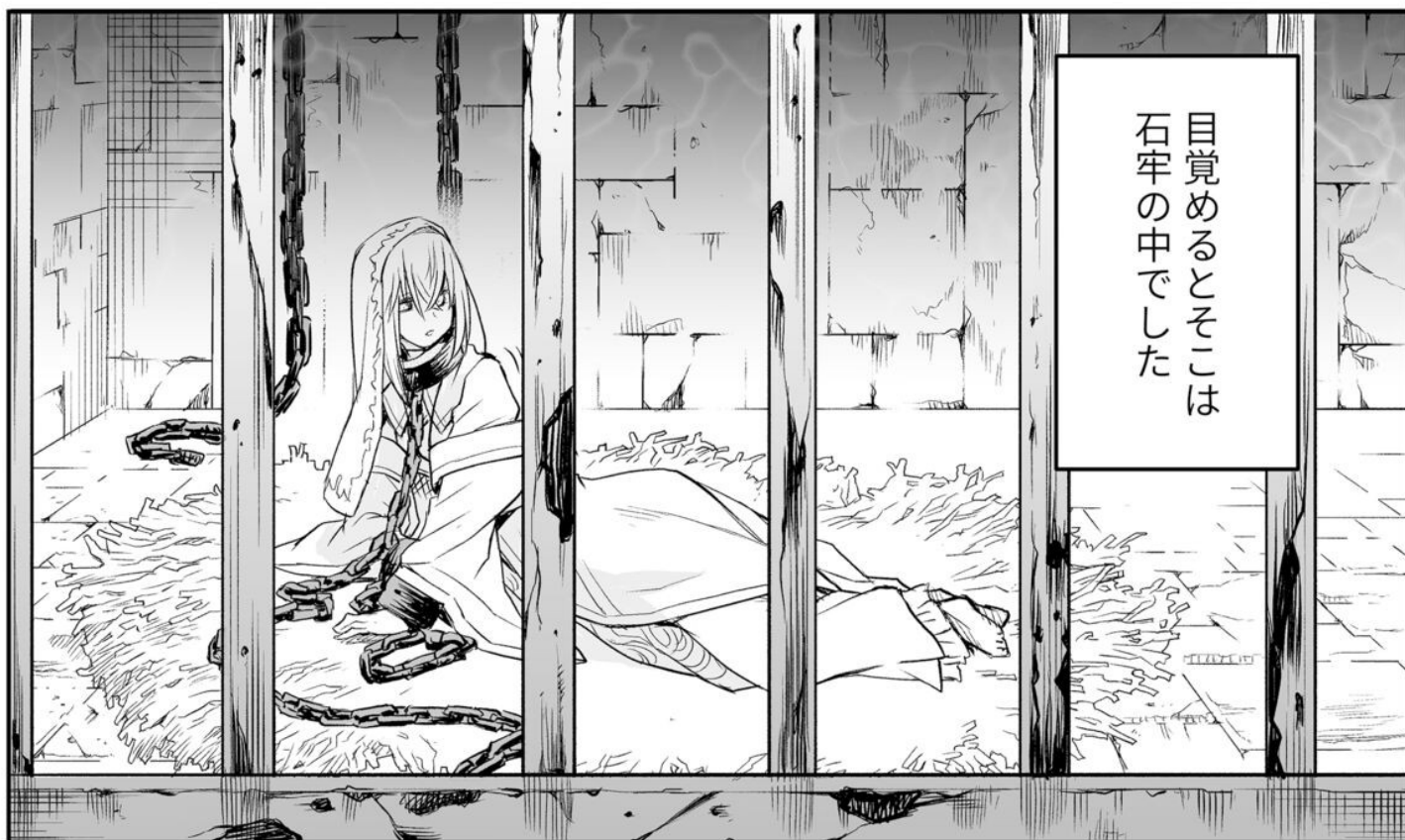
半大陸という魔界に
ほど近い土地を
私たちは巡礼していました

醜悪で凶悪な魔物も
出る危険な巡礼です

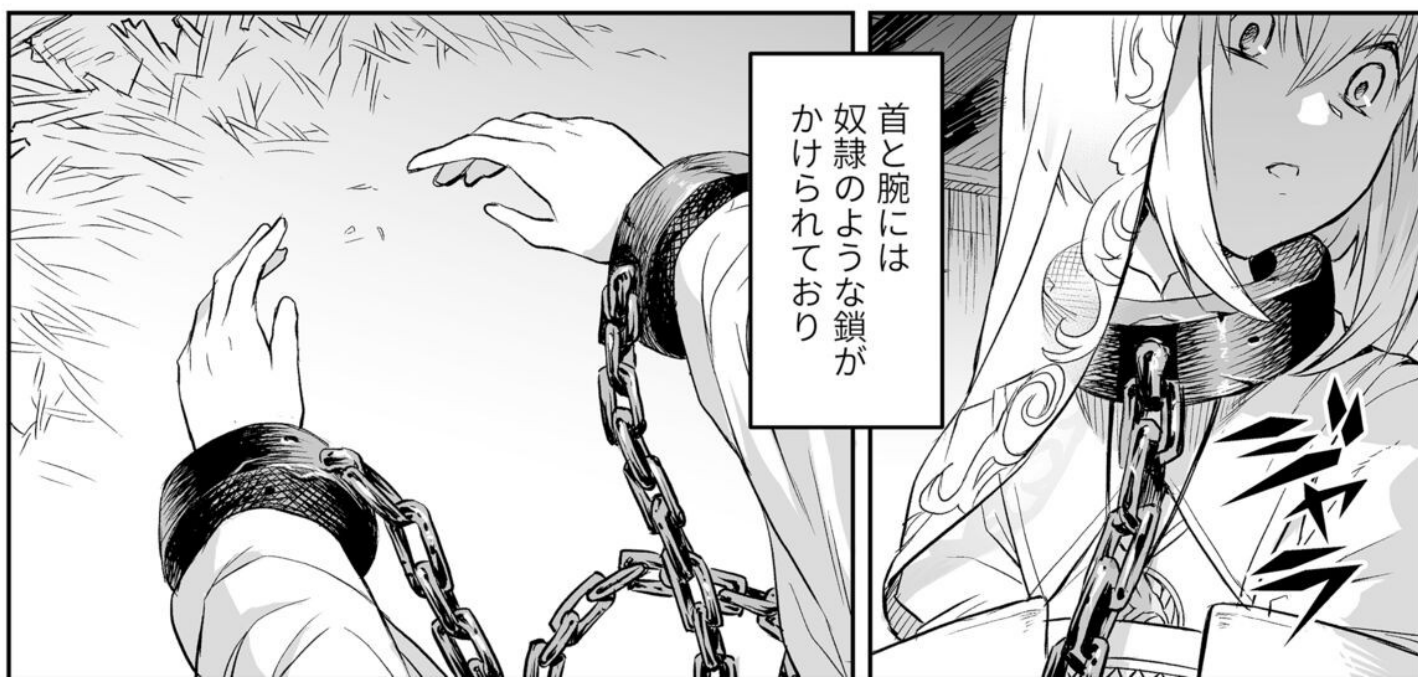


しかし
半大陸には信徒の方も
多くおり
必要な任務でした

そして魔物に
囚われたのです



目覚めるとそこは
石牢の中でした



首と腕には
奴隷のような鎖が
かけられており



そして――

まだこんなに
幼いのに



怯えなくても
大丈夫よ

ほら私も
あなたと同じ

…ッ!?

レク



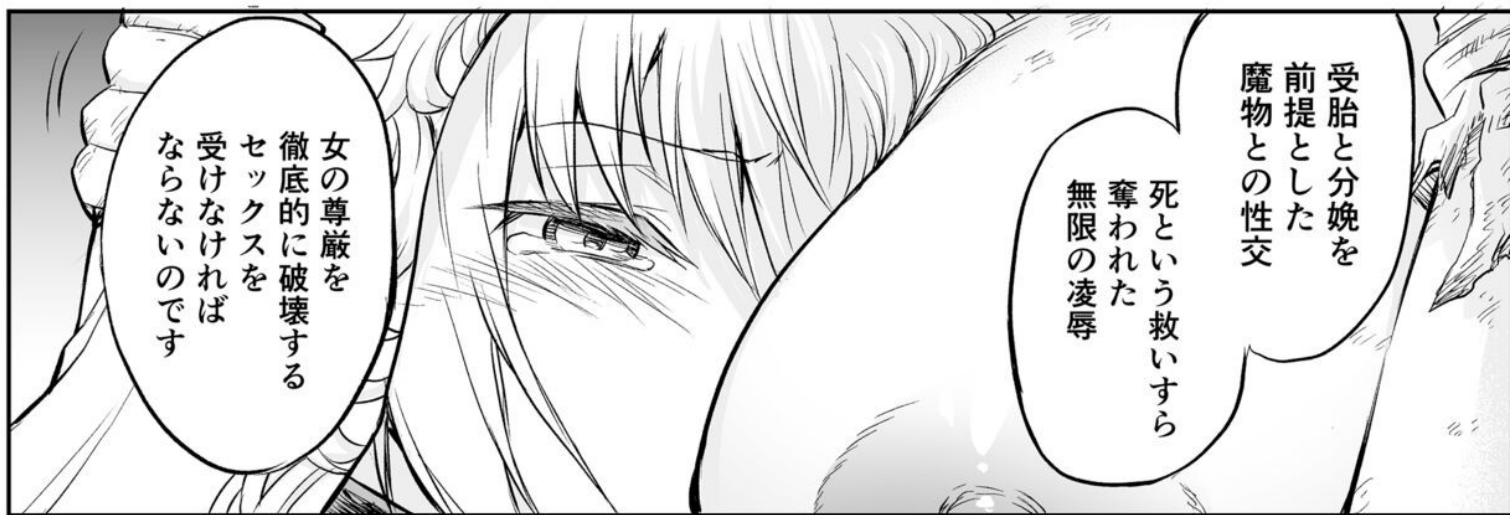
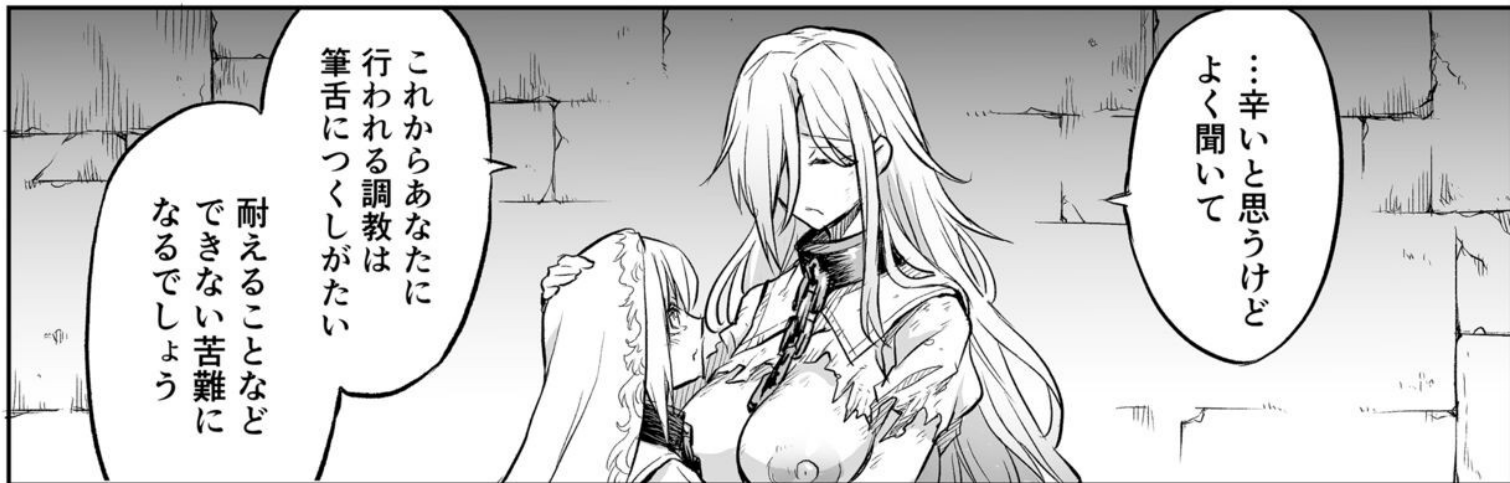
気の毒にね

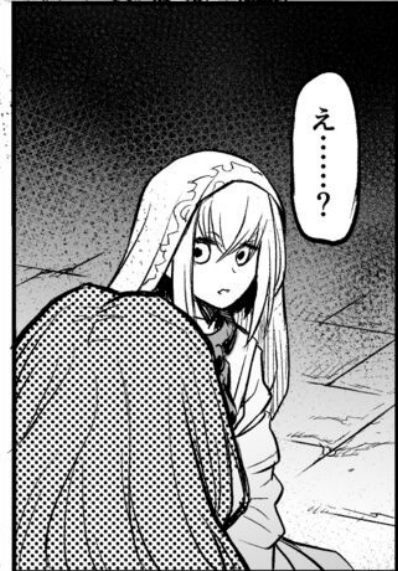


ユリイスキー教の
神官よ

カラシ

彼女と
出会ったのです





彼女は私の
教育係でした





泣いていた
のだと思います

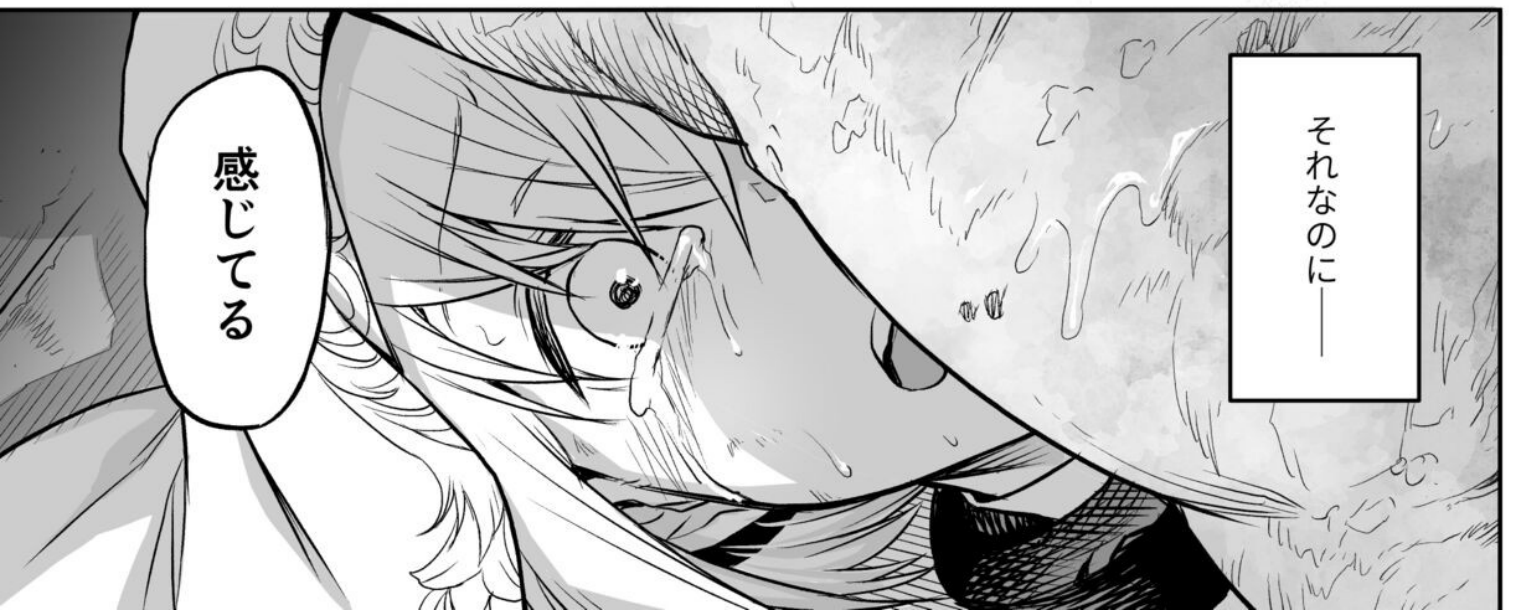


悍ましい男根に
繰り返し蹂躪される
度に

無残に散らされた
自分の貞操と

神への謝罪で

私の心はこの牢獄と
同じように薄暗く
淀んだものへと
変わっていきました



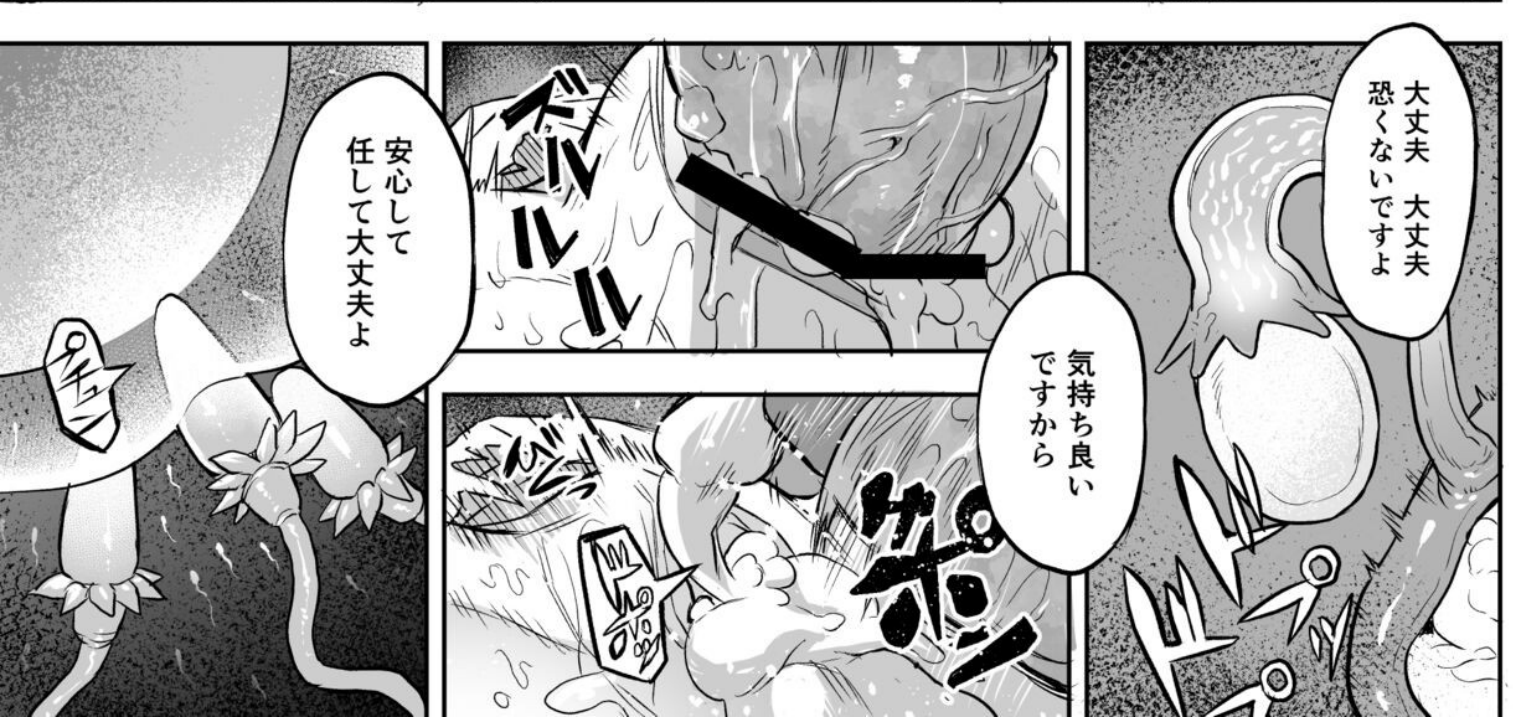
それなのに――

感じてる



肉の震えに合わせて
大量に吐き出される
雄の証

嘔吐を誘発する
ような醜悪さに私は
叫び 震え



大丈夫 大丈夫
恐くないですよ

気持ち良い
ですから

安心して
任して大丈夫よ

受精したのです



私の心は
それを否定し

私の体は
完全に
肯定しました

泣いても
喚いても

牝の宿痾からは
逃れることは
出来なかった
のです

魔物の成長は
大変早く

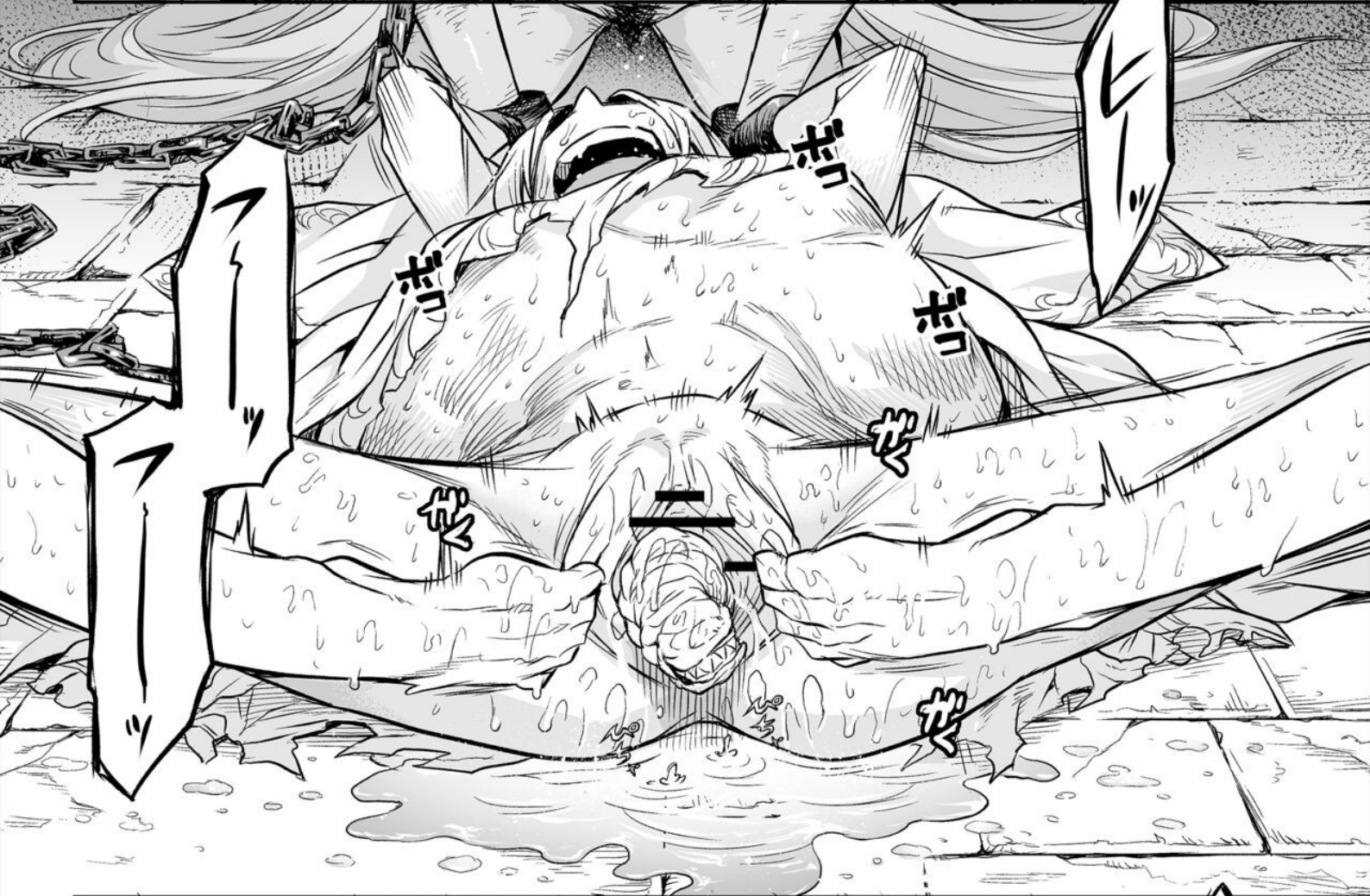
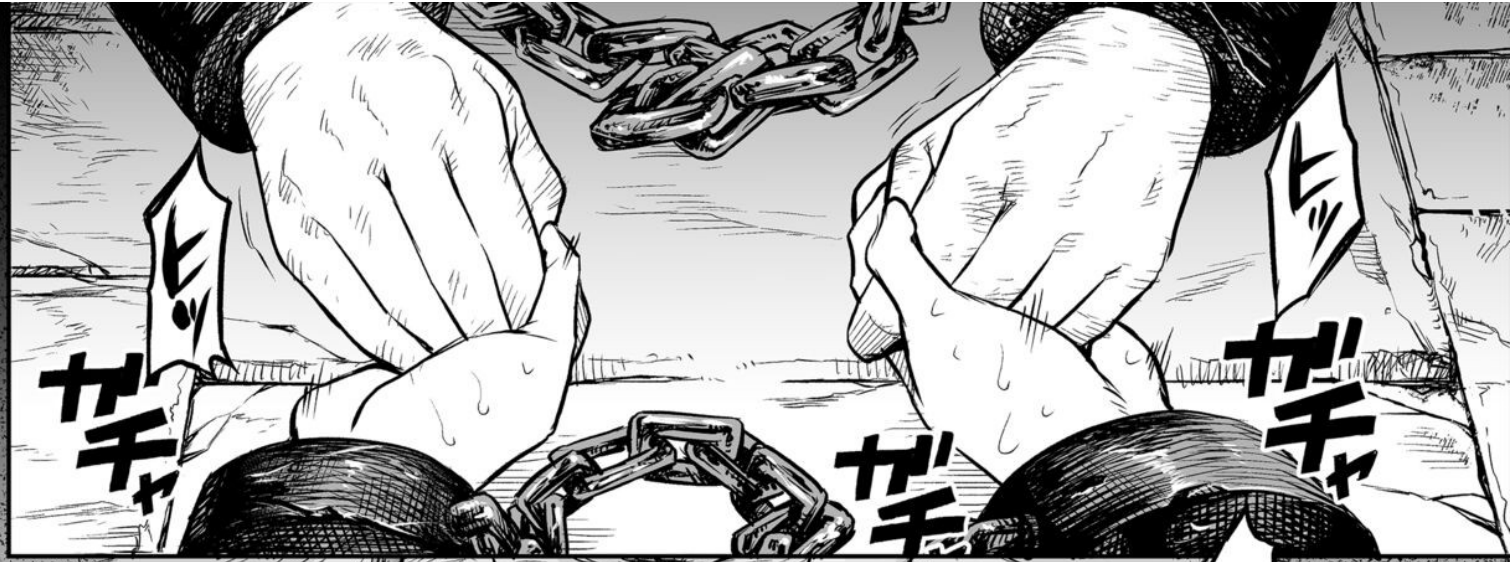
望まれぬ命を
宿した私のお腹は

瞬く間に
膨らんでゆき

10日ほどかけて

弾けそうな
果実のように
実りました

そして陣痛が
始まったのです







よく頑張りました



ああああ

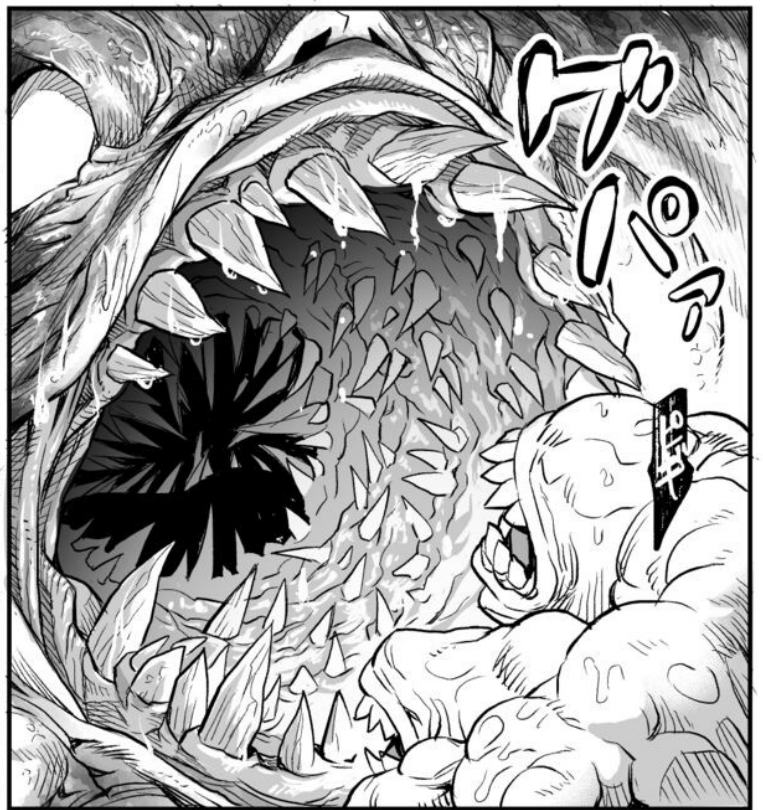


わたし…の？



あか……
ちゃん…？

あれが…





私の子宮は
魔物達にとって
苗床以下

食料生産用の
肉袋でしか
なかったのです

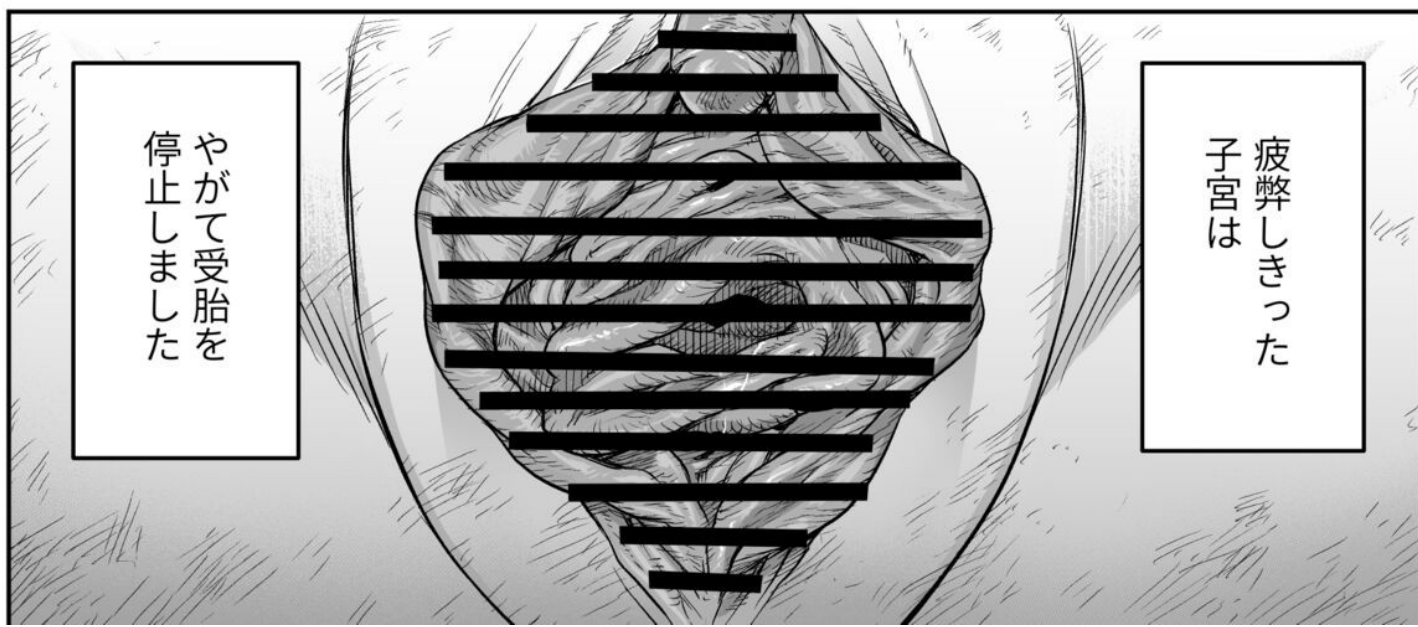


私はそれからも
出産母体として

幾度となく
勤労の絵勤めを
果たし



教育係の彼女とは
それきりでした



疲弊しきった
子宮は

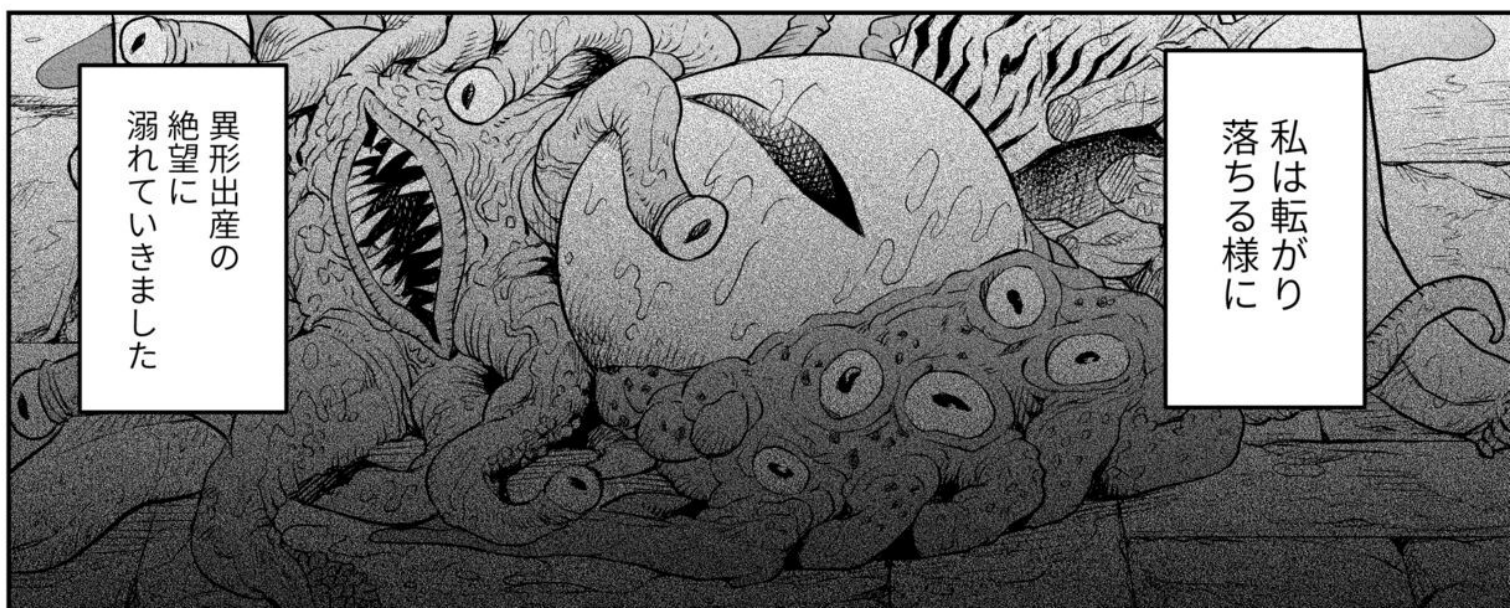
やがて受胎を
停止しました





多胎妊娠を
可能な体に
改造されたうえで

再度
受胎任務に
着いたのです



私は転がり
落ちる様に

異形出産の
絶望に
溺れていきました



どれほど時間が
たったのでしょうか



かつての彼女のように
新入りに出産の作法を
指導する立場に
なった頃



始めて手枷を外され
牢獄を出される事
になったのです



私にまだ
これほどの自由への
意思があるのかと

自分でも
驚きました



私の結末へ
出産した体を
引きずっていきました



まるで本能に
導かれるように



そこには
私の破滅がありました



狭い

狭い牢獄でした



むせ返るような
悪臭と瘴気

絶望と

悪意と

無慈悲と

狂気が
詰め込まれた
部屋



ヘッ

キヤ



そこにいたのは

私用に調整された
醜悪な繁殖用
個体でした



私は老いることのない
幼い体のまま

死ぬことすら
許されず



牢獄よりも小さな
この部屋で



永遠に
魔物を産み続ける
ことになるのだと



そして
理解しました



最後の時に
私はこの遺書を書く
機会を得ました

ぼっかりと字が
描かれていない部分が
私を封印するために
溶接された扉であり

この壁の向こう側に
私がおります

私の産道を
通ったものは
その下の排水溝から
流れるでしょう

願わくば
いつか

この哀れな肉に
救いのあらん
ことを